『東方』三〇二号より

中国史を学ぶ好伴侶

池田　温（創価大学教授／東京大学名誉教授）

本書は「中国の歴史を中国史の枠組みだけでなく広く世界史のなかで捉えるために、邦語を中心とする基本文献の紹介を軸に、歴史の意味や史料のあり方から、研究を助ける様々な知識まで、最新の中国史研究のエッセンスを伝えるベーシックな研究入門！」とうたわれる。その内容目次は次の通り。

はじめに　編者
序説　礪波　護
第1部　研究と史資料
第1章　先秦　浅原達郎・吉本道雅・江村治樹
第2章　秦・漢　籾山　明・佐原康夫
第3章　三国五胡・南北朝　渡辺信一郎・關尾史郎・川合　安
第4章　隋・唐　妹尾達彦・石見清裕
第5章　五代・宋　木田知生・宮澤知之
第6章　遼・西夏　森安孝夫
第7章　金・元　森田憲司
第8章　明代　岸本美緒・檀上　寛
第9章　清代　岩井茂樹・加藤直人・谷井俊仁
第10章　近代　井上裕正・村上　衛
第11章　現代　久保　亨・江田憲治
第12章　世界のなかでの中国史　杉村正明・岡本隆司

トップページにもどる

礪波護・岸本美緒・杉山正明共編
『中国歴史研究入門』
A5判・四七四頁・名古屋大学出版会・三、九九〇円

第Ⅱ部　中国歴史研究のために
A　史資料を読むために
1　目録学　井上　進
2　金石学・考古学　浅原達郎
3　地理学　大澤顯浩
B　付録　中砂明徳

末尾に各章別の文献一覧（ビブリオグラフィ）が附される。その内容篇数を概略示すと左のようになる。（→次頁）

章	頁数	篇数	日本人	中国人（韓国人を含む）	欧米人
1	五	二〇四	一八四	一九	一
2	六	二二三	二〇八	一二	三
3	一一	四〇一	三二四	七五	二
4	八	三一二	二六一	四四	七
5	一二	四五二	三七四	七七	一
6	三	九八	七五	一八	五
7	六	二一六	二〇八	八	〇
8	一二	四一九	三二八	六三	二八
9	一一	二七四	二五一	一四	九
10	一一	二七七	二三四	三一	一二
11	八	三一〇	二八三	二四	三
12	七	二四六	一七一	二五	五〇
計	一〇二	三四三二	二九〇一	四一〇	一二一

右表の数字は匆々に算出したもので不備が多かろうが、邦語を中心とするという趣旨が貫徹している点は明らかである。序説は①中国人の歴史意識②正史二十四史とその周辺③中国通史概説と工具書の三項に分って肝要な基礎知識をわかりやすく語る。以下時代を逐って王朝史の枠を基本に十一章の研究史と史料解説が並び、本書の主体をなす。各章はおおむね、研究の視点、研究の展開、史資料の解説の構成をもつ。

本書中最も注目されるのは第12章で、①中国史と世界史②ユーラシア世界史のなかで③世界史の転回④近代アジアと西洋の四項で人類史に占める中国史の特性を浮ぼりにする。

第Ⅱ部のA三項はやや簡略ながら断代史の闕を補い、B付録には、図書館・書店・暦・年表・人物・史諱・ローマ字表記・度量衡・貨幣・検索諸項のユニークな解説がある。

序説で礪波がのべるように、この種の中国史入門は、敗戦後（一九四七年に京都の東方学術協会主催十三回の講演を内容とする）『中国史学入門』（上巻、高桐書院、一九四七）に始まり、『中国史学入門』（東方学術協会編、右書を含み完結、平安文庫、一九五一、六九二頁、五八〇円）、『東洋史料集成』（世界歴史事典二三巻史料篇東洋、平凡社、一九五五、五五六頁、一七〇〇円）、『中国史研究入門』（山根幸夫編、山川出版社、上・下、一九八三、五四七＋五七〇頁、各三五〇〇円、増補改訂版、一九九一、六三〇＋六二六頁、各三九〇〇円）、『アジア歴史研究入門』（編集委員島田虔次・萩原淳平・岩見宏・谷川道雄他、同朋舎、一九八三、Ⅰ中国Ⅰ、Ⅱ中国Ⅱ・朝鮮、Ⅲ中国Ⅲ・目録学・歴史地理学・考古学・思想史・科学技術史・風俗史・女性史、一九八三、四〇九・二八〇・四二〇頁、各巻五八〇〇円、別巻、総目次・総索引・一九八七、二六八頁、六〇〇〇円、品切）右四種が出ており併せ参照されてきた。今回は既刊書と叙述が重複せぬよう配慮され、最新の情報まで含むから、これからはまず本書を一覧すべきである。

しかし右掲四種も決して不要に帰したのではなく、学説史を理解する上で、また史料解説の詳細にわたるもの、ユニークな見解のちりばめられた文など参看の望まれるものが少くない。執筆者は礪波氏六十代、二十名が五十代、七名四十代、三十代一名、所属は京大六名、京都府立大・名大・奈良女子大学二名のほか、東北大・東大・横浜国大・新潟・信州・埼玉・阪大・三重・早大・日大・中大・学習院大・京都女子・大谷・龍谷・佛教・奈良大各一名、計二十九名は国立十八・公立二、私立九名、地域は東北一、関

トップページにもどる

東七・中部四・近畿十七で北海道・中国・四国・九州を欠く。かように国・公・私大を揃え地域に若干かたよりはあるが全国を網羅したといえよう。全体的に京大大学院出身者が大半を占め、内藤湖南の史観の影響が著しい。この点は現代日本の中国史研究の顕著な特徴といえよう。

細部には不正確な記事（「一九三八年に両研究所が分離独立した際、東京が東洋文化研究所と称した」、一六頁、東洋文化研究所は一九四一年十一月勅令第一〇一二号で創設）もあり、第1章に王国維や郭沫若が現れず、吉本道雅が二十六篇を占めるような不均衡も目につく。

中国の史学は経学につぐ優厚な伝統をもち『中国歴史学年鑑』一九七九―（生活・読書・新知三聯書店）、『中国考古学年鑑』一九八四―（文物出版社）、『中国大百科全書中国歴史ⅠⅡⅢ』（中国大百科全書出版社、一九九二）、『中国通史』二十二冊（白寿彝主編、上海人民出版社、一九八九―九八）、『二十世紀唐研究』（胡戟等編、中国社会科学出版社、二〇〇二）等夥しい参考書が刊行されているのも努めて参照を怠らぬように心がけたい。筆者は本書を一読し学生時代に戻った気分となり研究意欲を鼓舞された。情報量に比し定価が貴くない点も有難い。

トップページにもどる